

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 15 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370400

研究課題名(和文) 19世紀ロシアの哲学詩とその文化的意義に関する研究

研究課題名(英文) The Study of Russian Philosophical Poetry in the 19th century and its importance for Russian Culture

研究代表者

坂庭 淳史 (Sakaniwa, Atsushi)

早稲田大学・文学大学院・教授

研究者番号：80329044

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究はおもに1820年代から1840年代のロシアにおける「哲学詩」の展開と運動をその対象とし、「哲学と詩の融合」を目指したこの運動の文化的意義について、哲学、宗教、歴史、政治、教育などの観点から総合的に分析している。詩人たちが哲学サークルの活動、批評などを詳細な考察を通して、この時代のロシア文化全体において知識人たちが直面した「理想と現実の乖離」という大きな問題を浮かび上がらせることができた。また、この問題を背景として、文学史上での「詩」から「小説」、ロマン主義からリアリズムへの過渡期において、「哲学詩」が文学と社会の相関を考える上で極めて象徴的かつ重要な現象であったことを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：The object of this research is the "philosophical poetry" of the 1820-1840's Russian literature. This was an active movement among the literary and philosophical groups of young intellectuals, aiming at "the fusion of philosophy and poetry". Through the analysis of their poetic works, criticisms, letters, and activities from various perspectives (philosophy, religion, history, politics, education, etc.), this research clearly showed the seriousness of the problem of the "divergence between ideals and reality". Also it has been clarified that from a viewpoint of the correlation between art and society, "philosophical poetry" was a symbolic and important phenomenon in the transitional period of the history of Russian literature, from poetry to novel, and from romanticism to realism.

研究分野：ロシア文学

キーワード：ロシア文学 ロシア詩 ロシア思想 チュツチェフ 愛智会 チャアダーエフ ベリンスキー

1. 研究開始当初の背景

ロシア文学の中で「哲学詩」という言葉は、広義においては文学ジャンルの名称の一つとして用いられている。したがって、その内容に哲学的要素を持つすべての詩作品をそう呼ぶことができる。もとより思想性が高いとされるロシア文学においては、実に多くの詩がそこに含まれる。一方、狭義において(最も限定された意味において)「哲学詩」は、1820年代から1840年代にかけて若い文学者・思想家たちが、ロシア詩の発展のあらたな方向性を模索しつつ、その中に哲学性を加えようとした運動を指すことがある。これまでの文学研究において、「哲学詩」はジャンルとして、つまり前者の意味で広く認識されてはいるものの、後者の意味では、その歴史的な役割や意義は十分には分析されてきていなかった。彼らの運動が同時代の文壇で成功を収めたとは言い難いという事実もその一因であろう。だが、本研究で注目したいのは、その後のロシア文学の発展に彼らの試みと失敗がどのような意味を持っているのかということである。近年ではとりわけ哲学詩の運動の中核を担っていた哲学サークル「愛智会」のメンバーたちの詩篇のアンソロジーが刊行されるなど、その詩に込められた思想が少しずつ注目され始めている。また、近代ロシアにふさわしい新たな「知」を構築する彼らの取り組み、さらにはドイツ観念論やプラトニズムからの影響を分析した研究書などが刊行されてきている。

本研究を構想するまで、代表研究者である坂庭淳史はフォードル・チュッチェフ(1803-1873)の詩や政治論文を研究の主な対象としてきた。チュッチェフは、広義での「哲学詩」の観点からロシア文学を代表する詩人である。また、チュッチェフ研究に関連して、チュッチェフの友人でありドイツ観念論の主要な思想家であるフリードリヒ・シェリング(1775-1854)や、そのルーツである古代ギリシャの哲学者プラトンの思想のロシアにおける受容・展開について継続して分析してきた。そうした研究の中で、哲学や思想がロシア文化史・文学史において果たした役割、あるいは宗教や哲学がロシア芸術に吸収されていく経緯について体系的に考察する必要を強く感じていた。ロシア、欧米での文学研究の領域では2000年代に入ってから、特にフォードル・ドストエフスキー(1821-1881)やレフ・トルストイ(1828-1910)、イヴァン・ゴンチャロフ(1812-1891)をはじめとした「19世紀後半」のロシアの「小説」に関して、作品に内在する思想と西欧の哲学、あるいはロシアのキリスト教(正教)を比較し関連付けていく研究、さらには純粋な哲学性を抽出しようとするようなこれまでにない斬新な取り組みが出てきていた。本研究は、そうした学術的潮流において、「19世紀前半」と「詩」を題材として新たな可能性を開く狙いのもとに始め

られた。

2. 研究の目的

本研究は、主に1820年代から1840年代に書かれた哲学詩と「哲学と詩の融合」をめぐる当時の論考や著作について、哲学、宗教、歴史、政治、教育などの観点から総合的に分析するものである。そのうえで哲学詩がロシア文学史、文化史において果たした役割について明らかにすることを目的とした。具体的な研究対象については「3. 研究の方法」で示すが、それらのいずれのテーマについても、a)「理想(イデア)」と「現実」の関係性 b)ロシア社会における詩(文学)の役割 c)新たな「知」の形式の模索の3点に焦点を当てながら考察を進め、一つの流れを導き出す。通常のロシア文学史では19世紀文学はおおまかに、前半を詩の時代、後半を小説の時代とされているが、その二つの時代の境界にある1840年代は、前後の年代と比べると大作家がほとんどおらず、文学史上で最重要とされる作品も比較的少なく、ときには空白の時代とさえ呼ばれる。本研究では「哲学詩」を、19世紀ロシア文学の前半と後半のこうしたミッシング・リンクを解消する重要な鍵と考えて分析した。

3. 研究の方法

本研究では主に1820年代から1840年代のロシアの「哲学詩」(およびそれに関連する当時の批評)と、その背景となる一世代前の思想、および同時代の思想に注目した。

哲学詩については、対象となる詩人、文学者は大きく二つの範疇に分けられる。第一には、モスクワの哲学サークル「愛智会」(正式な活動は1823-1825)で詩を書いていた、ドミートリー・ヴェネヴィーチノフ(1805-1827)をはじめとするメンバーたちである。ロシアにドイツ観念論、とりわけシェリングの哲学を普及させようとしたこのサークルでは、シェリングの芸術観に基づいた「詩と哲学の融合」が試みられていた。前述した狭義の「哲学詩」に関して、ロシアにおけるその推進役を自任していたのが彼らである。そして、デカブリストの乱(1825)の影響もあって短期間の活動で終わった「愛智会」のあと、同じくモスクワでニコライ・スタンケーヴィチ(1813-1840)を中心に設立された、いわゆる「スタンケーヴィチ・サークル」の哲学や文学、批評活動についても分析していく。シェリングから出発してヘーゲル哲学へとその関心を移していったが、二つのサークルに共通するのはプラトニズムを起源とする観念論への興味と、宗教よりも哲学を高く評価する態度である。第二には、アレクサンドル・プーシキン(1799-1837)、エヴゲーニー・バラトゥインスキー(1800-1844)、チュッチェフなどの哲学的な詩(前述した広義の「哲学詩」)である。特定の哲学を自身の詩の中に反映させるとい

う明確な意識を持たない彼らの中でも、愛智会の詩人たちときわめて対照的なのがチュッチェフである。彼は「愛智会」の詩人たちと同世代であり、モスクワ大学でもほぼ同じ教育を受けていて、学術・芸術的な出自や背景は重なる点が多いにもかかわらず、大学卒業直後に外交官としてミュンヘンへ赴任した後は長く国外で詩を書き続けたこともあって、その作風は独自性が強く、後の世代のロシア詩人たちから大きな支持を得た。本研究ではこれら二つの範疇の比較を通して、「哲学詩」の意義を浮かび上がらせるように試みた。

また、サルディニア大使であったジョゼフ・ド・メーストル(1753-1821)のキリスト教保守思想や、ピョートル・チャアダーエフ(1794-1856)の個と社会に関する思想など、愛智会より前あるいは同時代にロシアにおいて活躍し、19世紀ロシア全体の文学・思想的基盤を準備した世代の著作にも注目している。

以上のような文学者たちが書籍、定期刊行物の中で発表した言説、作品をモスクワ、サンクト・ペテルブルク、ヘルシンキの図書館で収集し、哲学、宗教、歴史、政治、教育などの観点から「哲学詩」の文化的意義を総合的に分析した。また「理想(イデア)」と「現実」の関係性や、ロシア社会における詩(文学)の役割、新たな「知」の形式の在り方などを共通する問題意識として各テーマの分析に導入するとともに、これまで坂庭淳史が主な研究対象としてきたチュッチェフに関する研究成果も考察に盛り込み、二つのテーマの研究の相乗効果の創出を狙った。そして、ロシアやその他の国の研究者などとも議論しかつ情報を共有しながら、導き出された結果については国内外での学会発表や学術雑誌への論文投稿を通して評価を問い、最終的には「哲学詩」を通じたロシア文学史、文化史の新たな読み解きを提示した。

4. 研究成果

研究成果については、大きく3点に分けて以下に説明し、「5. 主な発表論文等」での該当する業績を各項目の最後に記す。

1) 「哲学詩」周辺の思想の整理

3) で後述するように、本研究では「愛智会」、「スタンケーヴィチ・サークル」が特に関心を寄せたシェリング(およびヘーゲル)の哲学と芸術の関係に最も重要な考察の焦点を置いた。だが、その作業に不可欠な前提として、彼らの背景にあるロシア思想の流れを整理する必要があった。19世紀初めから1840年代までのロシアに流入し、展開していた思想や哲学の中で、本研究で特に注目したのが以下の二つの思想である。

a) ド・メーストルのキリスト教(カトリック)保守思想

1802年にサルディニア国王代理としてロ

シアを訪れた後、1817年まで滞在したド・メーストルは、カトリック由来の保守思想をロシアに広め、当時のロシア文化に強い影響力を持っていた。観念論哲学を高く評価した愛智会の思想は、これらの宗教色の強い、一世代前の保守思想とは真っ向から対立しているが、本研究では、対極にある思想の理解を通して彼らの思想をより鮮明に浮かび上がらせることができると考えた。思想の内容については、b)のチャアダーエフと合わせて詳述するが、まずはこれまで十分には分析されてこなかった「ロシアにおけるド・メーストルの思想の展開」を主題としたこと自体も研究成果の一つと言ってよいだろう。

b)チャアダーエフの『哲学書簡』と世界観
チャアダーエフは1836年に発表された『哲学書簡』での、ロシアの現状と歴史に対するスキャンダラスなまでの批判的認識がよく知られているロシア初の本格的な思想家である。彼はメーストル(およびカトリックの保守思想)からの影響も強く受けている。本研究では、チャアダーエフとメーストルの「現実」認識に基づく宗教的、歴史主義的な保守思想を、同じく保守的な思想を持ちチャアダーエフの親友でもあったチュッチェフの詩や政治論文における世界観と比較した。個と全体の関係を深く考えていた彼らだが、「個は全体(社会、歴史)の中に最終的に解消されるべき」と考えるチャアダーエフやメーストルほどに、チュッチェフの個に対する評価は低くはない。自由思想における個やエゴを厳しく非難しつつも、個の鮮やかな意識を作品において表現していたのが詩人チュッチェフであった。本研究ではまず、チャアダーエフとのチュッチェフが世界、ヨーロッパ情勢を当時のロシアでは珍しかったきわめて西欧的なまなざしで見つめていた事実を指摘した。そのうえで、彼らの世界観における「カオス」と「コスモス」の相関関係についての考え方の根本的な違い、「ロシアのカオス性」に対する二人の評価の違いを明らかにしている。

なお、保守思想に関連して、本研究では「愛智会」のメンバーであり詩人でもあった、ステパン・シェヴィリョフ(1806-1864)にも光を当てた。同じ「愛智会」出身で、後にロシアの精神性を西欧の合理主義と対置し、全社の優位性を説いてスラヴ派思想の論客となっていくアレクセイ・ホミャコフ(1804-1860)やイヴァン・キレーエフスキー(1806-1856)とは異なり、シェヴィリョフは政府寄りの保守思想を構築し、その代表者として名を知られていく。詩人としてのシェヴィリョフは、「愛智会」においてプラトンの観念論に影響を受けた詩からスタートしたが、次第にアリストテレスに端を発する理論を重んじる方向へ傾いていく。本研究では、後に反動保守思想家とも言われることになるシェヴィリョフの、理論や原理を第一とする思考がその著作『詩の理論』(1836)に

においてすでに見られることを明らかにした。ここで強調しておきたいのは、「愛智会」の詩や思想の中にもまた「個と全体」、さらには「詩(芸術)と社会」という重要なテーマが存在していたということである。(雑誌論文 学会発表、 図書 なお、学会発表は高く評価され、カンファレンス内から選抜された報告に基づく論文集[図書]に収録された)

2) 「哲学詩」の違い：愛智会とチュツチェフ

狭義の「哲学詩」の担い手である愛智会の詩人たちの作品は、その意図は理解されながらも文壇では十分な反響を呼び起こせなかった。その一方で、後の世代、とりわけ 19 世紀末から 20 世紀初めのロシア象徴主義の詩人、思想家たちによってその哲学的な内容の詩を高く評価されたのが、チュツチェフであった。本研究では、彼らの作品の差異を深く考えながら、愛智会やスタンケーヴィチ・サークルの詩人たちの「哲学詩」の詩の本質を抽出した。観念論哲学を世界観の基盤としていることはチュツチェフと共通しつつも、愛智会の詩人たちは、彼らの敬愛するシェリングの源流である、プラトンのイデア思想を強く意識していた。そして、イデア思想に基づく哲人政治および、プラトンのいわゆる「詩人追放論」を、つまり物事の真似を仕事とする詩人は市民の心に害毒を与えるから社会には不要であるという思想を、何とか克服しようとして彼らは思考した。彼らが観念論哲学に基づいて掲げる旗印「哲学と詩の融合」が「詩人追放論」と対立してしまうからである。彼らの「哲学詩」の活動においては、すぐ前の世代であるデカプリスト詩人たちとも同様に、「社会にとって有益である詩/詩人」という概念がその使命としていつも念頭に置かれ、その哲学的解決が探究されていた。だがそれは結局のところ、詩の中で表現される「理想」と「現実」の均衡を歪め、哲学から導き出される「理想」を表現することこそが「現実」にとって有益であるという偏った思考を生み、彼らの作品は結果的に「現実」から乖離してしまった(その典型的な例の一つが、1)で記したシェヴィリョフの『詩の理論』である)。同時代のロシア詩を代表するプーシキンは、彼らの試みに一定の理解と期待を示しながらも、彼らが既成の思想に頼りすぎていることを慧眼にも指摘している。一方のチュツチェフは、こうした詩/詩人の使命とは縁がなく、自らの感情や体験を媒介として観念論的な世界観を現実と調和させることに成功している。(雑誌論文、 学会発表、)

3) 哲学詩の役割

本研究における最も重要な目的が、狭義の「哲学詩」のロシア文学史・文化史を考えることであった。それに対応する、ロシア詩に

おける「理想」と「現実」の乖離の問題を扱った国際学会発表と論文が本研究の最も重要な成果である。「哲学と詩の融合」を書掲げた「愛智会」と、彼らの作品を「現実離れ」として批判し、現実に即した新たな文学の可能性を模索するペリンスキーの対立を軸として、本研究では 19 世紀全体のロシア詩の歴史を描き出すことができた。対立する二つの立場はいずれも観念論を拠り所とする哲学サークルから生まれてきており、ともにプラトンを理想の一つとしつつも、芸術における「現実」の重要性にいち早く気が付いたのが ヴィッサリオン・ペリンスキー(1811-1848)であった。ペリンスキーが、当時の一部のロシア詩の現実との乖離を批判しながら、その一方で、1840 年代中頃に現れたドストエフスキーの小説の存在と現実描写の力と世に知らしめ、19 世紀後半のロシア文学の中心となる小説というジャンルを高く評価したことがそれを象徴している。そして、ペリンスキーのこの批評精神を受け継ぎながらも、芸術と現実(哲学的「理想」と「現実」)の関係をもう一度やはり詩において表現しようとしたのが、ウラジーミル・ソロヴィヨフ(1853-1900)であった。さらにソロヴィヨフの思想に強い影響を受けながらロシア詩の復興の担い手となるのがロシア象徴主義の詩人たちが、ソロヴィヨフをはじめ彼らが自分たちの芸術の先駆けとして注目したのがチュツチェフなのである。

本研究では 1820 年代の「哲学詩」の運動から、結果的に 20 世紀初めの象徴主義までを扱った。その中で見えてきたのは、ロシアの詩の歴史を通底する「理想」と「現実」の相関関係への高い意識と、それに伴って生み出される哲学的思考であった。愛智会やスタンケーヴィチ・サークルの詩人たちの「哲学詩」の試みの失敗こそが、こうした思考の重要性を逆説的に浮かび上がらせている。(雑誌論文 学会発表 なお、学会発表は、サンクト・ペテルブルク大学よりイーゴリ・エヴラムピエフ教授を本研究の費用で招聘し、その他 3 名の内外の研究者とともに国際学会「第 9 回国際中央・東欧研究協議会(ICCEES)幕張大会」において立ち上げた共同パネル「ロシア観念論の諸問題」の中で発表したものである)

最後に研究全体の成果を概観し、今後の研究の展望についても記しておく。本研究の最大の特徴は「哲学詩」という文学、思想・哲学という二つのジャンルにまたがる、ロシア社会全体を強烈に意識しつつ活動していた芸術潮流に注目したことにある。この「哲学詩」を対象とすることで、従来の文学、思想研究の枠組みを超えて、ロシア文学史、文化史における一つの系譜を明らかにすることができた。これは、キリスト教(カトリック)保守思想や自由思想、ドイツ観念論など、当時のヨーロッパ共通の文化的基盤を確認し

ながら、19世紀ロシア文化のオリジナリティを詳述する作業でもあった。これに関連して、当初の計画にはなかったものの、研究の成果とともに現れてきた課題が「ロシアにおける全一性概念の発展と、芸術におけるその表現」である(図書などを参照)。ソヴィエトの映画監督アンドレイ・タルコフスキーの作品をはじめ、ロシア芸術全体を通底する独創的な思想について、各芸術ジャンルの特性を踏まえつつ今後も研究を進めていく所存である。

研究の実践的側面では、本研究での活動を通して、サンクト・ペテルブルク大学の研究者たちと強固な研究協力体制を築けたことも記しておきたい。サンクト・ペテルブルク大学は、哲学と芸術の関係に関する研究のロシアにおける拠点の一つとなっており、研究成果の世界への発信力にも優れている。本研究は、同大学のイーゴリ・エヴラムピエフ教授のドストエフスキー研究とも「共著論文」という形で接続し(雑誌論文)、また、同大学では2016年には国際シンポジウム「日露哲学対話」を開催(大会組織委員として参加)し、今後の研究発展の可能性を大きく開いた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

_____ ,
1820-1830 , ,
査読有, 20, 2016, 79-86

坂庭 淳史、シェヴィリョフ『詩の理論』におけるプラトン、アリストテレス：スラヴ派か官製国民性か、ロシア文化研究、査読無、23、2016、1-15

坂庭 淳史、1830年代ロシア文学の理想と現実 スタンケーヴィチとベリンスキー、早稲田大学大学院文学研究科紀要、査読無、60、2015、83-98

_____ , (共 著)
:
:
査読有, 46-2, 2015, 35-50

[学会発表](計5件)

_____ ,
:
:

_____ ,2016.9.15,
(ロシア)

Atsushi Sakaniwa, Chaadaev and Tyutchev: History, system and chaos, Peter Chaadaev: between the love of fatherland and the love of truth, 2016.6.6, Krakow(Poland) (プログラムは英語で作成された、発表はロシア語で行われた)

坂庭 淳史、ジョゼフ・ド・メーストルとロシアの保守思想：チャアダーエフとチュツチェフ、「近現代ロシア文化におけるプラトンおよび古代ギリシャ表象の諸問題」研究会、2016.3.2、早稲田大学(東京都新宿区)

Atsushi Sakaniwa, The Ideal and Reality of Russian Philosophical Lyrics in the 1820-1840s, 第9回国際中央・東欧研究協議会(ICCEES)幕張大会、2015.8.5、神田外語大学(千葉県千葉市)

_____ ,
《 _____ 》

_____ 《 _____ 》,
《 _____ 》

_____ , 2014.9.8,
(ロシア)

[図書](計3件)

Atsushi Sakaniwa, Chaadaev and Tyutchev: History, System and Chaos, Peter Chaadaev Between the Love of Fatherland and the Love of Truth, eds. by Artur Mrówczyński-Van Allen, Teresa Obolevitch, and Paweł Rojek, Eugene, OR: Pickwick Publications 2017 (印刷中)

_____ ,
Образы «дома» и «стола»

_____ ,
_____ , 2, 2014, 252-259

坂庭 淳史、ナウカ出版、プーシキンを読む：研究のファースト・ステップ、2014、89

6. 研究組織

(1)研究代表者

坂庭 淳史 (SAKANIWA Atsushi)
早稲田大学・文学学術院・教授
研究者番号：80329044